

音楽科鑑賞授業において 生徒間コミュニケーションを成立させる教師の手立て ー《箏独奏による主題と六つの変奏〈さくら〉》を教材とした場合ー

学籍番号 239345

氏 名 三井達哉

主指導教員 兼平佳枝

副指導教員 藤本佳子

序章

筆者がこれまでの学校教育で受けてきた音楽科授業では、教師の指示に従って、歌唱やリコーダーの練習をしたり、音楽を聴いて感想を書いたり、定期試験に向けて作曲者の名前や歌詞を覚えるといったことなどが主となり、誰かとコミュニケーションをとる場面は少なかった。筆者が実習を行なっている中学校においては、数学科において自分の考えた解法を交流したり、音楽科において「曲のテーマとなっている動物は何だろう？」という発問に対し、生徒は自身の意見を交流したりしていた。そこで、筆者の問題意識と、実習校における取り組みから、音楽科授業において、生徒間コミュニケーションを成立させるには、教師としてどのような手立てができるか、疑問をもった。

以上より、本研究の目的は、中学校音楽科鑑賞授業において、生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の手立てについて明らかにすることである。研究の方法として、まず、本研究における音楽科授業におけるコミュニケーションについて規定する。そして、その理論的視点をもとに、音楽科授業における生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の手立てを取り入れた音楽科授業の計画・実践及び、授業記録に基づく授業分析を行う。最後に結論を導出し、考察と今後の課題を述べる。

第1章 音楽科授業におけるコミュニケーション

まず、一般的なコミュニケーションについて調べ、整理した。一般的なコミュニケーションとは、動物どうしの間や、社会生活を営む人間の間で、視覚・聴覚に訴える各種のものを媒体として行われる知覚・感情・思考の伝達と捉えられていることがわかった。

次に、教育におけるコミュニケーションについて調べ、整理した。教育におけるコミュニケーションとは、人間が相互に、言語または身振り、表情を媒体として、知識・意見・感情・願望などの情報を伝達・交換し合う過程であり、共通性をつくりだそうとする営みということがわかった。

そして、音楽科授業におけるコミュニケーションについて調べ、整理した。音楽科授業におけるコミュニケーションとは、子どもが、演奏を含む音楽作品の完成という共通の目的の実現のために、言語や音、身体を媒体として、音や音楽と相互作用を通して生成した意味を共有する過程であることがわかった。

以上より、音楽科授業におけるコミュニケーションを、子どもが、演奏を含む音楽作品の完成という共通の目的の実現のために、言語や音、身体を媒体として、音や音楽との相互作用を通して意味を共有する過程であると規定した。

第2章 研究授業の計画・実践・分析

筆者は、中学校第1学年を対象とした鑑賞授業を実践した。教材は、藤井凡大作曲の《箏独奏による主題と6つの変奏「さくら」》であり、単元名は、「変奏曲形式を意識して《箏独奏による主題と六つの変奏「さくら」》を味わおう」である。まず、単元を構成するにあたっては、生成の原理に基づいた単元構成の枠組み【経験—分析—再経験—評価】を使用した。そして、第1章において規定したコミュニケーションに基づいて、生徒間コミュニケーションを成立させるために、①共通の目的をもつ場の設定、②生徒が音や音楽と相互作用できる場の設定、③意味を共有する場の設定、の3点を授業構想の視点として設定した。その授業構想の視点から、手立ての1つとして、本研究授業では、自分たちのイメージに近いイラストを選ぶ、という活動を取り入れた。

授業分析においては、抽出班が音楽について話し合っている場面を抽出した。まず、生徒間コミュニケーションが成立しているかどうかを判断するために、以下の2つの分析の視点を設定し、授業分析を行なった。

ア) 共通の目的は何か

イ) 班員に共有されている知覚・感受したことは何か

次に、その抽出場面において生徒間コミュニケーションが成立していると判断できた場合、以下の視点を設定し、授業分析を行なった。

ウ) その要因となっている教師の手立ては何か

分析の結果、抽出したどの場面においても、本研究において規定したコミュニケーションは成立していなかった。そのため、生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の手立てについて明らかにすることはできなかった。

終章

研究の結果、結論は、本研究での研究授業の授業実践からは、生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の手立てについて明らかにすることはできなかった。

そこで、本研究において、生徒間コミュニケーションを成立させるための教師の手立てについて明らかにすることはできなかった要因について考察した。考察は次の3点である。①生徒間コミュニケーションが成立しうる場面において、筆者の机間指導が不十分であった。②筆者の発問が不十分であり、生徒が「何をしたらいいのかわからない」という状態になってしまった。③イラストを選ばせる活動について、イラストを選ばせるだけにとどまり、感じ取ったことを言語化する場面がなかった。

今後の課題は次の2点である。①生徒間コミュニケーションを成立させる教師の手立てを明らかにすることができなかった要因をもとに、授業を改善・実践・分析し、生徒間コミュニケーションを成立させる教師の手立てについて明らかにする。②実際の学校現場において、生徒間コミュニケーションを成立させる音楽科授業を積極的に取り入れ、実践する。